

バンコク日本人学校での実践
～国際性豊かな人材を育成する教育活動について～

朝霞市立朝霞第二小学校
横瀬 修克

1 はじめに

派遣一年目となる 2013 年には反タクシン派による反政府デモが頻繁に起こっており、翌 2014 年 5 月には軍事クーデターが起こった。また、2015 年 8 月には、爆発テロ事件が起こり、国際的なニュースとして取り沙汰され、多くの方々にご心配をおかけした。

爆発事件については、政府の政策に対して不満をもった外国人が観光地を選んで起こしたものとして、危険度も高かった。しかし、タイ人の多くは小乗仏教の教えを大切に、性格は非常に明るく穏やかで優しく、普段、普通に生活をしていたり、反政府デモが起こっている中に入っていくたりしない限り、特に危険な状況に陥ることはない。

また、タイ人の国民性を表しているのが、国王への敬意である。毎日朝 8 時と 18 時には駅やラジオなどの公共放送で国王賛歌が流れ、誰もが曲が流れ終わるまで活動を静止する。国王の誕生日や記念日には、多くの人が国王の誕生色である黄色の服を着てお祝いをする。派遣期間は、政情が不安定ではあったが、穏やかなタイ人に囲まれながら、比較的安全に過ごすことができた。

2 派遣期間を振り返る視点

現在、あらゆる分野において国際化が進展し、多様な考え方や価値観を持つ人々との共生は私たちにとって重要な課題である。また、経済のグローバル化が進み、海外に活躍の場を広げる日本人は多い。日本という国全体が大きな転換の時期を迎えている今、国際的な視野を持ち、世界と対等に渡り合える人材の育成への期待は大きい。海外で育ち、異文化を自然な形で受け入れ、柔軟な感性を育んできた児童生徒には、国内だけでなく、世界においても、国と国とを結ぶ、まさにグローバルな視野に立った活躍が期待される。

そこで、バンコク日本人学校での実践を通して、国際性豊かな人材を育成していくための教育活動のあり方について考えていくことにした。

3 バンコク日本人学校の実践

1 年次

1 年目小学部 1 年の担任として、子どもたちに指導した。バンコク日本人学校では、文部科学省の学習指導要領に則り、日本と同等の教育を行うことを目指し、教育活動が行われている。そのような中で、動物園や公園への校外学習、タイ現地校との交流学习会、タイスタッフへの感謝を伝える会、地雷を踏んで大怪我をした象を題材にした道徳の授業など、在外教育施設でしかできない教育的活動を行っていった。

【実践事例①】 校外学習 1 年（サファリワールド）

校外学習の目的は以下の 2 点である。

- ① サファリワールドにいる動物や自然に親しむことができる。
- ② サファリワールドで楽しく見学しながら、そこに来ている人やそこで働いている人々に関心をもつことができる。

小学校に入学したばかりの子どもたちが初めていく校外学習となる。14クラス450名いる学年を2日に分け、7クラスずつ行く。1時間ほどバスに乗り、園に着くと、クラスごと2列になって、園内を周る。動物園自体は、日本の動物園とそう変わりはないが、キリンの顔が目の前まで迫ってくるエサやりとアシカのショーは、子どもたちも特に楽しみにしている活動となる。この校外学習を通して、子どもたちは動物に親しむだけでなく、海外での集団行動の仕方を学んでいくことになる。



【実践事例②】校外学習1年（ラマ9世公園）

校外学習の目標は以下の3点となる。

- ・ 学校を離れた場所での自然観察を通して、主体的・自主的に活動することのできる子どもを育てる。
- ・ タイに住んでいるという環境を生かし、タイの植物、場所などに親しみや愛着をもつことができるようにする。
- ・ 公共の施設を大切にしようとする意識やマナーを育て、正しく利用できるようにする。

12月から1月にかけてタイの花は満開となる。ラマ9世公園は、区画整区画され、管理も行き届いており、たくさんの美しい花が見事に咲く公園である。子どもたちは、1年の中でも一番涼しくなる気持ちの良い気候の中で、自然散策と自然観察の2つの活動を通し、上記の目標を達成していくことになる。



子どもたちは、年間を通して日本の公立学校と同じように、教科の学習を進め、行事を経験していく。そのような流れの中で、特に抵抗や違和感を感じることなく、タイの文化や生活習慣・生活様式を受け入れ、タイ人への理解を深めていくことができる。

2年次

2年目研究部長として、主に校内研究を進め、学校採用教員の研修を担当していくこととなった。本校は、海外の学校ということに加え、児童生徒数が3000人に達するような大規模校であるため、特異的な教育環境が生まれている。一方で日本と同等の教育を行うことを理念としつつも、地域・保護者からは海外での特質を生かした教育が求められている。

校内研究では、児童生徒の実態を捉え、課題を明らかにし、一人ひとりの力を伸ばす

研究を進めていった。その中で、在外教育施設ならではの学びに必要な時間・空間・人材の課題が明らかになり、そのような環境下でどのような教育活動を行うことができるのかを考えていった。

また、大学を卒業したばかりの若手が占める学校採用教員の研修を進める中で、教師として必要な資質だけでなく、海外の地で働く教員としての心構え、態度等についても一緒に考え、研修を積むことができた。

本校には、その他に、宿泊研修や夏季職員研修などがある。宿泊研修では、1年に1回タイの北部・東北部・南部のいずれかの現地校を訪れ、授業を行ったり、交流を図ったりする。訪問する各地域の学校は、豊かな学校ばかりではない。募金や募品で成り立っている学校、山間部に位置し、交通が不便なためになかなか必要なものが揃わない学校。そのような学校の子どもたちが、私たちが用意した学習や活動に目を輝かせながら楽しそうに取り組む姿は、授業に向けて指導案を作り、教材・教具を用意した疲れをいっぺんに吹き飛ばしてくれる。また、様々な環境の下、一生懸命学校に通い、生活に必要な力を身に付けるために学んでいる子どもたちの姿から「教育とは何か」「学びの在り方とはどうあるべきか」を根本から考え直すことができた。

夏季職員研修では、現地の学校、企業や日系企業の工場を見学することで、タイ国に根ざした経営手法を学び、国際的な視野や知識を身に付けることにつながった。

【実践事例③】 宿泊研修（カルラートラングサン校）

近隣の5校の幼稚園から6年生までの630名程度の子どもたちを集めて授業を行った。学級数は20学級編成とし、全グループが2時間分の授業を行った。学級は、普段一緒に学校生活を過ごしていない子ども同士で編成されていた。教室は、校舎の中がいっぱい使用することができず、臨時に校庭の青い芝の上に椅子が並べられて作られた青空教室。黒板だけは、どうにか授数分揃えてもらうことができた。

授業は、「友達と仲良くしながら、すすんでけん玉を作り、様々な技に挑戦し、楽しんで遊びに取り組むことができる。」を目標として、行った。作る過程では、1日目と同様に、一つ一つの作業を区切って、指示を出し、活動をしていった。紙コップにカラーペンで絵を描く作業では、熱心に取り組み、一人ひとり丁寧に仕上げていった。ひもをガムテープで紙コップにつける作業が難しかったようで、教員が個別に対応をしていった。遊ぶ場面では、だんだんと上手になり、紙コップの中に、丸めた紙の玉を入れられるようになっていった。上手な子には、ひもを長くして、難易度を上げて、取り組ませていった。カルラートラングサン校の先生のサポートもあり、子どもたちはとても楽しみながらけん玉を作ったり、遊んだりすることができた。



【実践事例④】 職員研修（焼き物（素焼き）彫刻体験）

活動前に、講師からクレット島の陶器についての説明を受けた。材料

は、島の土だけを材料に使って作られている。釉薬（上薬）も使わない。粘土をセ氏950度ほどで素焼きすると鮮やかなオレンジ色に仕上がる。さらに、いったん焼き上がったものを再び釜の中に入れ、大量の粃殻とともに1100度ほどの高温で「焼き締める」と粘土そのものが熱に反応し、灰色に変色する。「焼き締める」ことで強度も上がる。研修では、予め粘土で作られたアロマポットに、カービングによってたくさんの模様を刻んでいく活動を行った。講師の指導を仰ぎながら、クレット島の伝統的な模様やオリジナルの模様を付けた自分だけの作品を仕上げた。タイ文化の一つである焼き物の素焼き彫刻を製作する活動を通して、巧みな指遣いが必要とされる繊細な模様に感心したり、タイ文化の美術の奥深さを感じ取ったりすることができた。



3年次

3年目第2小学部長として、4～6年生を中心に小学部の学習・行事を進め、支援していった。小学部の3年以外の校外学習や5年の臨海学校、6年の修学旅行の引率に行ったり、全学年の交流学習会を引率したりした。在外教育施設的な活動が各学年の活動を通して見ることで、学校教育が段階的・系統的に行われていることを知ることができ、子どもたちの成長の中で一つ一つの点が線となり、力になっていることが実感できた。

【実践事例⑤】校外学習4年（バンケン浄水場）

校外学習の目的は以下の2点である。

- ・浄水場を見学して、水がどのようにしてきれいで安全な飲料水になるのかを調べ、浄水場の働きと働く人々の工夫や努力を考えることができる。
- ・浄水場を見学して、施設のしくみや働く人の工夫や努力などを聞き、集めた情報をまとめることができる。

世界的に見れば、まだまだ多くの国で簡単にきれいな飲み水を手に入れることができない状況である。その原因は、浄水場をつくるお金と技術がないことによる。バンケン浄水場は、日本やJICAの職員の協力により作られたものである。日本の中でも最も大きい大阪の村野浄水場、埼玉の朝霞浄水場の敷地の4倍程になる。子どもたちは、広大な施設を見学させていただき、JICAの職員に話を伺うことで、日本の浄水場と比較しながら、水がきれいになって、生活に欠かせない水として利用されていく流れについて学習していった。



【実践事例⑥】 交流学習会 1～6年

バンコク日本人学校では、低学年がカセサート大学附属小学校、中学年がダラカム小学校、高学年がシーナカリン大学附属小学校と、1年ごとにホスト・ゲストを交代して交流を深めている。交流学習会の中で、各学年の子どもたちは様々な活動を行っている。スポーツ交流では、綱引きをしたり、ダンスを一緒に踊ったり、日本の遊びによく似たゲームをしたりしている。文化交流では、折り紙をしたり、ストローを使って花を作ったり、筆で字を書いためんこを作ったりしている。また、東日本大震災の復興ソングとしてタイで歌われている「思いやりの花」や童謡「ぞうさん」をタイ語や日本語で歌う活動を通して、言葉は違っても同じ歌を歌うことを知り、子ども同士の距離が一層近づいたように感じた。また、タイの子どもたちの踊りを見て、日本にはない衣装や所作で踊ること、そしてその国でずっと大切にされてきた伝統や生活習慣を受け継いでいることを学んでいく。

低学年の子どもたちの様子を見てみると、必ずしもたくさん話をしたり、教え合ったりする場面が多いというわけではない。しかし、緊張しながらも、一緒に遊んで笑い合い、歌を歌って気持ちを一つにする経験が、自然と他者を理解する気持ちへとつながっているように感じた。中学年になると交流は活発になり、相手校の友達と言葉を交そうとしたり、相手の活動や表情を意識したりしながら関わるようになる。そして高学年では、責任をもって自分の役割に取り組むことで充実感を得たり、自分たちが楽しむだけでなく、相手の気持ちに想いを馳せ、相手を喜ばせることに気を配ったりしながら交流するようになる。こうして、交流学習会を経た本校の子どもたちの意識が「タイの子どもたち」から「タイの友達」へと変わっていくと言える。



【実践事例⑦】 修学旅行

6年生の修学旅行の目標は以下の3点である。

- ・ チェンマイの文化・歴史・風俗・習慣について学ぶことを通して、タイ国をよりよく理解し、より好きになることができる。
- ・ 公共の場での集団活動を通して、時と場に応じた行動をとろうとする態度を高めることができる。
- ・ 集団の中で自分の役割を果たすことを通して、集団生活の楽しさを味わうとともに、責任をもって集団に寄与しようとする意欲を高めることができる。

上記の目標を達成するために、様々な活動を行っていった。ワットドイステーブでは、クラスごとに寺院を巡り、メーサーエレファントキャンプでは、象乗り体験をしたり、ショーを見たりした。また、平成27年度より取り入れたセラドン工場での体験学習では、焼き物づくりの行程の説明を聞き、思い思いの筆を使って皿に絵付けをしていった。出

来上がった焼き物は、後日嚴重に包装され、送ってもらい、子どもたちにとって大切な思い出の品となった。目玉となるのがメーゲットノイ村の見学とメーゲットノイ校との交流学習会である。農村では、住居に入らせていただくことで、農村の方々の生活について肌で感じ、交流学習会では、バンコク日本人学校の子どもたちが、習字を教え、メーゲットノイ校の子どもたちからはトゥン(紙飾り)の作り方を教えてもらった。1年生から続けてきた交流学習会の中で培った力がバンコクから遠く離れたチェンマイの現地校で発揮されることになった。



4 さいごに

1年目は学級担任として子どもたちの視点に立って、2年目は研究部長として教員の資質向上という視点に立って、そして3年目は第2小学部長として学校全体のことを視野に入れながら、様々な教育活動を行い、国際性について考えることができた。

ある保護者から「国際結婚家庭の子どもは、他の子どもや保護者から見下されている、手がかかる、と思われている。」という話があった。本当にそのような偏見・差別があるのだろうか。実際学級には、日本と同じように友達に嫌なことをされた、いじめを受けたという事案が起る。例えばそれは、「話し方がおかしい」、「(人と)変わったことをする」など他との「違い」があることを原因として起ることが多い。本来であれば、人は、身長・体重・髪質・声質・行動など全く同じであるはずがない。しかし、「同じような」人が多数を占めたとき、人には、「違う」者を排除したり、差別したりすることがある。それならば「日本人(両親が日本人)」が多数を占める教室において、国際結婚家庭の子どものように、「日本人」と違う子どもがいたら、「違い」から意地悪をされたり、悪口を言われたりすることは起こりうる。

3年経って改めて国際性について考える。それは、自国・自分について知り、他国・他民族を理解し、受け入れ、国際的な視点に立って、人類の平和・発展を考え、行動していく力と言えるのではないだろうか。

バンコクは、様々な国籍の人々が集う都市である。子どもたちは、そのような環境の中で自分が日本人であることを実感しながら、日本の公立学校と同等の教育を受け、たくましく成長していく。

その結果、日常生活の中で、日本人というアイデンティティをしっかりと確立させながら、他国の文化や伝統を肌で感じ、吸収していくことができる。国際性の基盤となる自己理解と「違い」を認めていく力を培っていると言える。

研修・研鑽を積んだ国際性を備えた教師が、子どもたちの国際的な活動・経験、一つ一つを評価し、意義付けしていくことで、国際性の基盤となる資質・感覚を子どもたちに育むことができるのではないだろうか。そして、そのような教育活動を長い年月の中で営み続けていくことが子どもたちに豊かな国際性を育てていくことにつながっていくと考える。